青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
印刷所　オリオン印刷㈱
0252-83-2151

新年のごあいさつ

青山同窓会会長　鍵冨清一郎

みなさん　あけましておめでとうございます。今年は雪なしの正月で、何かとすごしやすかったことでしょう。この秋には新幹線も走ることになり、ほんとに便利になり喜ばしいことです。そして、青山同窓会も、母校の創立九十周年の記念式典を迎えることになりました。毎年毎年、年ごとに同窓会も盛んになりうれしい限りです。昨年頃から、九十周年に向けて数数の事業計画が立てられ、募金が始まりました。各学年の幹事の人達には、大変ごくろうをかけていますが、みんなこれも同窓会のためだと、いっしょうけんめいにやってくださって、本当に感謝しています。どうか、会員の皆さんも幹事さんの呼びかけに、こころよく協力してくださるようにお願いをいたします。

夏の総会に又、元気で、たくさん集まってくださることを楽しみにしています。

ごあいさつ

教頭53回　桝潟昭夫

昨年四月に転勤して参りました。本校昭和二十年の卒業でして、創立九十周年を目前に控え、ちょうどよいところに同窓の教頭が来たと、且下こき使われております。

何もかも昔とすっかり変りました。以前の体育館（「東控所」と呼んでいましたが）の一部が校地の片隅に残っていて、これが唯一の昔の名残りでしょうか。学校の周りもしゃれたマンションなどが立ち「霞たなびく青山」の面影はありません。しかし昔からの伝統も結構残っております。校舎は鉄筋になったとはいえ、相変らずうすぎたなく汚れておりますし、時間割変更で六限打ち切りという嬉しい制度も連綿として続いています。

変ったといえば、この頃は先生のアダナがめっきり少なくなりました。これは本校に限ったことではなく時代の流れですが、一寸寂しいことです。私どもが生徒の頃は本名よりアダナを先に覚えたものです。例えば教務室へ入って、「○○先生に用があって参りました」と言おうとしてとっさに名前が浮ばず、のどまで出かかったアダナをぐっと押えてまた出直すといった具合です。当時はどういうわけか動物のアダナが圧倒的で、新中動物園などと言ったものでした。失礼をも省みず、懐しいお名前を列挙させていただきますと、サンゾク、モズ、シャモ、ガニ、ゾウ、アオブタ、フナ、セイバン、アカオニ、ブル、ヤマネコ、ヤセウマ、ゴリ、ヤマザル、クマ。（サンゾクやセイバンを動物の仲間に入れて申し訳ございません）この中にはまだご存命の先生方も何人かおられます。いかがお暮しでございましょうか。

さて、私どもは五十三回卒業ですが、入学の年に太平洋戦争が勃発、予科練などで途中退学者も多く、その上戦時中の緊急措置で四年卒業、しかも最後の学年は名古屋などへ勤労動員に駆り出され、さんざんな時代でした。ついに最上級生になることなく、いじめられる一方で、あまり楽しい思い出はありません。そのためか同窓会への出席が悪く、名簿もブランクが目立ちます。ただ本年度は、母校で教鞭をとる同期の仲間が三人となり、PTA会長も同じ五十三回生という理由からか、まことに盛会でした。九十周年の募金も順調でございます。

ところで、毎日新聞新潟版の、「青春の森」に目下新潟高校が連載されております。担当の新聞記者が取材に学校を時折訪ねて来ますが、職員一同一生懸命に昔を想い出して協力しております。青山九十年の歴史が完結する春頃を楽しみにしております。

では最後になりましたが、同窓の先輩後輩の皆さん、九十周年記念事業へのご協力をお願いして、ごあいさつといたします。

年頭随想

吠える犬は……

校内幹事　上杉雅之（60回）

★イヌ年である。さすが一番古くから人間に飼われている動物だけあって、洋の東西を問わず数多くの表現に登場しているようである。英語の辞書を開いてみる。トリ年の稼ぎ頭、「なめ猫」ならぬネコの約二倍近くの表現が「ドッグ」の項にのっている。ところがどういう訳か気の毒にも悪役が多い。

イソップ物語の「かいばおけの中の犬」（意地悪な人）、「犬のところに行く」（堕落する）、「眠っている犬はそのままに」（さわらぬ神にたたりなし）。なんともあわれである。そんななかに私をニンマリさせる諺がある。「吠える犬はめったに噛まない」すなわち、口やかましい人は悪意がないという。日頃生徒に「口やかましい」私は、英語流のこの解釈が大好きでならない。

★日本人を評して世界で囁かれている「3S」という暗号があるという。サイレンス（沈黙）・スマイル（微笑）・スリープ（睡眠）。旅行でも会議でもなるべくしゃべらず、とにかくにこにこしていて、やがて疲れてねむるのである。頭文字が三つとも英語のSである。

日本が東南アジアで最大の経済援助をしているタイ国。そこで「味の素」に現地採用されたというタイ女性の言葉をNHKの報道特集で耳にした。「ニホンのヒトタチ、シゴトオシエルトキモ、イチネン一回のパーティーのトキも、ホトンドハナシマセン。ニホン人ダケデカタマッテイマス」一年間仕事を共にしても「殆んど口をきかない」日本人。タイの婦人の不安な気持が読みとれるのであった。

★年頭からアメリカ経済外交使節の往来がひんぱんである。日本経済・貿易の閉鎖性を口やかましく論じ、門戸の解放を要求している。

アメリカの肩を持つつもりは毛頭ないが、約千万人を数える失業者を抱えるこの大国が日本に吠えかかる姿には、なりふりを忘れた人のよさがある。

吠えたてないダンマリ犬の不気味さを日本人商社員に見るタイ婦人を象徴とする東南アジア諸国に対して、もの言わぬ円貨を投げつけるのではなく、本来は「思いやり」のある国民性を持つ日本人を宣伝できる若者を育てるよう、本年も「吠える犬」でありたいと思うのである。

56年度総会

幹事長　50回　上村光司

昭和五十六年度の青山同窓会総会は、七月八日、新潟市オークラホテル三階の宴会場を埋め尽くして開いた。午後六時すぎ、筑波竜二実行委員長（五十二回）が開会宣言。鍵冨会長、本間校長あいさつ、東京同窓会役員・出席者の紹介、あいさつのあと、会務報告、五十五年度決算、五十六年度予算をそれぞれ可決、承認し、鍵冨会長、阿部、等々力、鈴木各副会長以下全役員を再選した。続いて懇親会に移り、君知事、川上新潟市長らが抱負を織りまぜつつお互いの健康を祝い、校歌斉唱と進んで二十六回根布義雄氏の音頭で乾杯、開宴にこぎつけた。

出席者約九百名。最年長はもちろん鍵冨会長の第十九回生、最年少は八十四回生の小出弘君。今年が総立九十周年に当たるだけに、

（2面へつづく）

（1面よりつづく）

出席者の年輪は六十六重になる。今回は、従来の抽選プレゼントに代わって、最多出席の期に〝賞〟を出すことにしたが、第一位は七十八回生（五十一人）が獲得した。以下六十回生(四十一人)、五十二回生(三十八人)、五十三回生（三十四人）、六十三回生(三十三人)、四十九回生(三十一人)＝いずれも出席者数は前売券による。当日では会場混雑して正確に掌握できぬため。さらに〝大先輩組〟の多数出席賞という意味で、第四十回生（三十人）に特別賞を贈った。賞品はウイスキー。ただし少々の量で恐縮の至り。

新潟市の宴会場では一番広いはずの会場も遊泳ままならぬ人の数が歓談一時間半余り、最多出席賞をとった七十八回生の応援団高唱あり、阿部藤策副会長（二十八回）の音頭で万歳三唱して幕を閉じた。

◇

五十五年度の総会で、会場を、「香港」からオークラホテルに移した。その経過は再三説明させていただいて来たので、繰返すのは控えさせていただくが、五十六年度総会についても会場問題は、苦渋に満ちた選択であった。実行委員会の論議は、もっぱらこの点で終始した。その結果、前回の不備を改めることによって再挑戦してみようということに行き着いた。とにかく、食べ物の量をふやすこと、経費の割りには懇親会の進行を停滞させるきらいのあった抽選をやめて、出席多数期への賞にかえること、また大先輩組のために前年は一部を着席にしたが、皆様大丈夫、お元気であるということで、全部立食形式にさせていただくこと、などであった。

その結果については、またすぐにご批判を頂戴しているし、さらに続けて拝聴して行きたい。応援歌高唱乱舞の光景がなくなったとか、校歌斉唱のさい、まだまだ、〝新〟の声が淋しいのは、旧制組みんな長寿健康の現われであるかなど、いろんな感想の行き交う毎年の総会である。いずれにせよ、上は米寿を越え、下は若冠。三代にわたる同窓が一堂に集う光景は壮観というほかない。同窓会の原点はここにあると観念し、今後の運営を心掛けたい。

写真で見る 56年総会

ふりむけば〝愛〟

―母校に愛を、寄付金を―

九十周年記念事業進捗状況

記念式典・記念祝賀会

十月二日、本校体育館にて式典を挙行後、会場を新潟市体育館に移し、記念祝賀会（立食パーティー形式）を開催する予定。

記念演奏会、記念講演会

すでに同窓会より寄贈していただいたグランドピアノの披露演奏会を開く予定。同窓生（特に新進気鋭の若手）のピアニストに白羽の矢をたてたいとのこと。また記念講演会の講師についても、なるべく同窓生の逸材にお願いしたいとの方向で、現在人選中です。乞御推薦。

青山九十年記念誌

明治二十五年以来の本校の歴史を描く一大叙事詩はすでに、八十年記念時に発刊されているが、今回は、その後の十年の沿革史を加えると共に、生きた証人各期の代表による、学校生活回想による肉付けが期待される。現在、本校社会教諭の方々の手で作業が進められているが、秘話、逸話を待っております。

青山同窓会々員名簿

八十周年記念事業の一環として出版された会員名簿の整備、改訂増補、新会員の追加等の作業を各期の幹事の諸氏にお願いしております。五十九期のように、もはや名簿原稿を提出いただいたように各期におかれましては、着々と作業が進んでいるようです。なお、原稿締切は三月末日ですが、編集、印刷、校正の作業が時間的に制約を受ける事が懸念されますので、会員の方の御協力をお願いします。なお、名簿の価格は、まだ不確定要素がありますが、二千円以下になるだろうと考えております。希望の方は幹事、事務局の方へお申し出下さい。また、名簿に広告を掲載の希望の会員の方がおられましたら、事務局へ申し込み下さるようお願いします。

第二体育館（格技場）

かねてより格技場を中心とする第二体育館の建設が望まれていたが、昨年の県への陳情活動の結果、建設実現に向っての明るい見通しが得られそうである。実現の暁には、施設、備品充実が望まれる。

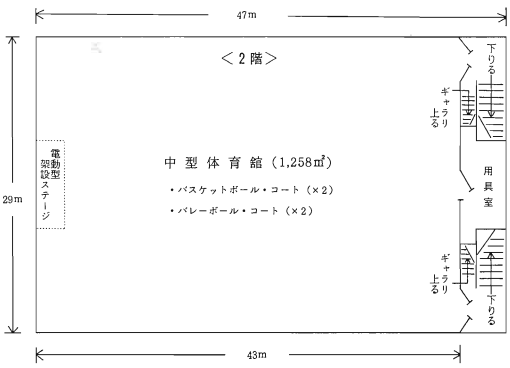
クラブ活動振興基金

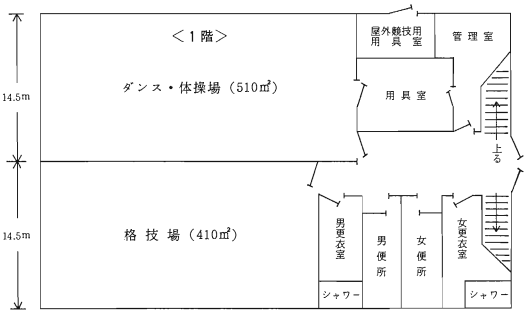
昨年の、ラグビー（総体）野球（県大会）フェンシング（北信越）各部の優勝、その他クラブの活躍はめざましく、今後ともクラブ活動活発化を期待したい。

§　§　§

以上の各分野での事業計画に賛同して、現在連日のように寄付金がよせられている。どうか「母校に愛を」募金に協力下さるよう重ねてお願い申し上げます。

新設希望体育館の各室配置図





青山フラッシュニュース

◎師弟コンビによる大学受験予備校「信濃学園」が駅南地区に今春開校する。校長は中川保氏(47回)、理事長は藤田一巳氏(74回)妙な数字の組合せのこの師弟コンビの予備校、既にあるいくつかの予備校にどのような特色をもって、なぐりこみをかけようとするのか、大いに期待が持たれるところである。

◎五十嵐一氏(74回イラン哲学者)が科学の名著シリーズ(朝日出版)で、アラビア医学の大学者イブン・スィーナーの医学典範をアラビア語から直接訳すという労多い、仕事をやってのけ、学界で高く評価されている。

科学の名著8「イブン・スィーナー医学典範」朝日出版社(東京都千代田区西神田三―三―五)

29年振り 野球部 県大会優勝

第六十五回北信越高校野球県大会決勝戦は十月一日新発田球場で行われ、母校野球部は新発田高校を破って優勝した。野球部の県優勝は、昭和二十七年夏の大会以来二十九年ぶり、昭和二十四年春の大会以来三十四年ぶりのことである。

野球部員は、一、二年生で二十九名という有史以来の大世帯で、初の甲子園出場を目ざして意気軒昂たるものがある。

県高校球界は、実力接近、飛び抜けたチームはないだけに、初の甲子園出場を狙えるチャンスであると同時に、不安もある。それは野球というスポーツの持つ性格による。偶然性、運不運……。

偶然を必然とすべく、不運を運とすべく、部員は、現在冬季トレーニングに励んでいる。

今後とも、先輩諸氏の一層のご声援をお願いする。

秋季大会の戦績は次の通りである。

△新潟地区予選

□二回戦

新　潟 1 0 0 0 1 0 3 1 2　8
新潟西 0 0 0 0 0 0 0 0 0　0

□三回戦

第一　0 0 0 0 0　0
新　潟 0 8 2 1 ×　11

□地区代表決定戦

新　潟 1 0 0 0 3 0 2 0 1　7
巻　2 0 2 0 0 1 0 0 0　5

△県大会

□二回戦

新　潟 1 0 0 0 0 5 0 0 0　6
糸商工 0 0 0 0 1 0 0 0 3　4

□準決勝

新　潟 0 1 1 0 0 0 0 0 0　2
新発田 0 0 0 0 0 0 0 0 0　0

□決勝

糸魚川 0 0 0 0 0 1 0 0 0　1
新　潟 0 0 0 0 2 0 0 0 ×　2

〔新潟日報戦評〕

決勝戦らしい1点を争う引き締まった好試合となったが、新潟が長打攻勢にスクイズをからめて挙げた2点をエース中村義の好投で守り切った。立ち上がりは糸魚川・小野、新潟・中村両投手とも低めへのコントロールを主体にした打たせて取る投球で安定した滑り出しだったが、新潟は五回、先頭諸橋がやや制球の甘い直球をたたいて左中間を破る三塁打、笹川も右中間を破る二塁打で先制、さらに一死二塁から、近井がウェストボールに飛びつきながら一塁線に絶妙のスクイズを決めて貴重な2点目を挙げた。

糸魚川は、中村義のカーブを主体にした打たせて取る投球によく食いつき、一、七回を除いて再三塁上をにぎわしたが、好機に併殺を喫するなど県大会無失策を誇る新潟内外野の堅い守りに阻まれ、六回、中越え二塁打で出た小野を松田の中犠飛で返した1点だけにとどまった。

キャンパスだより

東京大学一年　大越健介（野球部OB）

私の通う東京大学教養学部は、渋谷から井の頭線で二つ目、閑静な住宅街で知られる駒場の地にある。毎年東大に合格する者が三千余名、二学年留年者を含めて約七千名の学生がこの駒場に通学している。

本郷のキャンパスには、法・経・文・教育・理・工・農・薬・医の九学部があり、学生は三年進級時に振り分けられることになるが駒場は、そうした専門課程の準備段階としての、教養課程の履習のための所という性格をもっている。三年進級時の振り分け（通称「進振り」）のために、教養課程、とくに文三・理一・理二など、本郷進学後の分野が多岐にわたるところにおいては、受験戦争顔負けの猛烈な点取り競争が展開される。何故なら、駒場での各試験の平均点によって希望の学部、学科へ行けるか否かが決まるのである。定員が決められているから、人気の高いところに行くには、それだけ高い得点が必要となる。得点万能主義思想に飼い慣らされた悲しむべき東大生により、難しい学科は神格的価値を与えられ、難化は難化を呼び、進振り情報は入り乱れ……と、つまり、偏差値ピラミッドの頂点に立っている東大の中をルーペで覗いてみたら、そこにもまたピラミッドができていた、というようなものである。

こうした中にあって、東大の学生像は、と眺めてみると、果たして、亜流点取満太郎君が多くて、多少の失望を免かれない。点を取るのが上手な人間は、要領のいい人間が多い。彼らは、その調子で人づき合いやら遊びやら、みな上手にこなす。いかにも世渡り上手、出世しそうな人達である。多少鼻持ちならない。「亜流」とつけたのは、かつてのようなガリガリの純正点取満太郎君が、今では姿を消しつつあるからである。だが、こうした誰もが、本郷の専門へ行くと、学問の奥深さに目覚めるという。競争からの開放、権威ある教授陣、それとも、あの銀杏並木が、三四郎池がそうさせるのだろうか。私も、この恵まれた環境の中で、少なくとも学問する姿勢は身につけて、この東大を卒業したいと思っている。

話を私の属する野球部のことに移す。四年生の抜けた今、部員は三十名強、午過ぎから暗くなるまで、ほぼ毎日本郷の野球場で汗をしぼられている。他大学と違って輝かしい球歴を持つ者もおらず、初心者も混じっているが、一致団結して日々努力を重ねている。我野球部は常に前方を見つめている。非力な無名集団、六大学リーグのお荷物と陰口をたたかれることも珍らしくないが、昨年は早慶を連破するなど、徐々にこれまでの努力が実りつつあると思う。前向きの姿勢を崩さず、今後も頑張りたい。余談だが、新潟高校野球部が、昨秋の県大会で、二十数年ぶりに見事優勝を飾った。同部OBの一人として胸のすく思いである。今後も精進して、初の甲子園切符を手にして欲しい。

ハイティーン水泳

新中・新高①

60回　平田大六（関川村）

1　田舎者の入学

「なに？　ズンだあ？　孔子の思想がか」

「はい、ズン　です」

あ、、平田はザイゴ生れだったな、そうだ、それは仁（ジン）だな、と先生は助けてくれた。一九四六年、新潟県立新潟中学校一年五組、東洋史の池政栄先生の講義だった。

「では、北京原人の学名を云ってみろ」

「はい、スナントロプスペキネソスス」

あはははは。

私が入学した頃は、母校は高校ではなく、旧制の中学校だった。学区制はなく、小学校を卒業すれば、どこからでも受験できた。しかし県内なりの地域からきてはいたけれども、私の出身地は、その分布のなかでは、はるかに裾（すそ）野に位置していた。

せっかく新潟へ勉強しにきたのだから、クラブも文化部へ入ろうとした。そこへ、運動部でないと、上級生にいじめられると、だれかが知恵をつけてくれた。田舎者の私に気のきいたスポーツができるわけがない。

入学式の日に、私はプールというものをはじめて見ている。キラキラ輝くきれいな水のなかで真紅のフンドシの上級生たちが泳いでいた。これに魅かれた。だいぶたってからわかったのだが、これが部員募集の客よせだったのだ。私はこれにひっかかったのである。

長つづきするなら入れ、母は云った。

私の心のささえになったのは、故郷の清流で泳いでささやかなキャリアだけだった。

2　水泳部入部の日

その日、はじめて新一年生たちは、コースロープのはずされたスタート台にぎっしり並んで立たされた。距離はむこう岸までの二十五メートル。

私は、頭からとびこめないので、足から落ちて、水にもがいた。この二十五メートルが長かった。コンクリートに手がぶつかったので止まってみるとゴールだった。ふりむくと、まだ皆は、こちらにむかって泳いでいる。どうなったのか、すぐにはわからなかった。

見上げると、オカから上級生の手がのびていて、私は引きあげられ、そのまま、主将の前にひきずり出された。主将は、昔、工作室に

（4面へつづく）

（3面よりつづく）

あった四角い頑丈な椅子に肢を開いて腰かけていた。肩にはバスタオルをふりかけている。

「どこから来た？」

「はい。新潟県、岩船郡…」

「新潟県はよい！」

「はい。岩船郡女川村立川北国民学校」

私の出身地の発音には、幸なことに苦手な「チ」や「シ」の音がなかったのだ。

「どのへんだ？」

「新津から、羽越本線で坂町で乗りかえ」

「知らないなあ。そんなとこ」

まあ、こんな調子の不明瞭（りょう）なやりとりのあとで、主将は、きっぱりと云いすてて椅子を立った。

「明日から、二年生と一緒に泳がすっけな」

この意味を説明してくれる仲間は私にはまだいない。不安な気持でプールサイドを歩いてもどるときに、背中にヒソヒソとつたわってきたのは、あいつは特別にナンギイ（難義）練習させられっろ、という話声であった。

3　しごきの応援歌

旧制中学だから、一年から五年までの生徒がいる。月並みな言葉ではあるが、五年生なんてのは、オヤヂみたいなもんである。このオヤヂたちが、時には猛獣（じゅう）にかわるのである。

応援歌の練習のときがそうである。

放課後に、新一年生全員は、校庭に集められた。まず、ガリ版刷りの数枚の紙が渡された。それには下手クソな字で応援歌がギッシリ書かれてあるのだ。それを明日まで全部を暗記してこいというのだ。

「一人、一人、前へ出て歌わせっけな！」

曲もわからない、ただの歌詞だけのものを、私は、勉強をやめてこれの暗記につぎこんだ。こんなものやりたくないけど、あの猛獣（じゅう）がこわいのだ。

つゞく日の放課後、全員集合する校庭へ重い気持で集っていった。授業中にも暗記をくりかえして備えた生徒もいた。そこには、もう、喜々として目を血走らせている上級生が待っていた。獣（けもの）たちは、壇の上にあがって旗を振る。私たちは、暗記してきた歌をせいいっぱいの声でくりかえす。

声が小さいろう！

きこえないろう！

新中が泣くろう！

ふたことめには、「シンチュー」なのだ。怒声がとび、見えない方向から、肉体を打つバシッ、バシッ、という気味悪い音がきこえてくるのだ。旗振りの上級生は、次々に交代で一人づつ壇上に立つ。はじめの一節を旗振りが歌う。旗振りは気おいたっているので、たいてい調子はずれで、声がつづかず、金切声になって絶句してしまう。

この時、一年生の誰かが笑った。

「何を笑うんだ！」

小柄の旗振りは、手を止めて、旗をもちかえた。これが火のように怒ったというのであろう。

「なめる気かあ！」

という、するどい一声が、まわりの上級生の一人から発せられると、つられたように、つぎつぎに、とりかこんでいる上級生の口々から、罵（ば）声がとんできた。

「全員、座って目をつむれ！」

静かになった校庭。笑った奴は手をあげろ！。さっきのバシッ、バシッという肉の音が私に近づいてき、恐怖は最高潮になる。

ようやく地獄から解かれた私は、いそいそとプールへもどってからゾッとした。なんと、さっき「火のように」怒った旗振りや、怒声の主たちが、お、かた水泳部の上級生たちではないか。

私は、これからつゞくであろう、五年間という、日々の暗さを思わずにはいられなかった。

（以下次号につづく）

思い出さまざま

28回　海潮音

前号の会報に「三人の校長先生」を投稿したところ偶然にも同期の阿部藤策元母校校長の特別寄稿と同じ内容のものとなっていた。早速同君に連絡したら、次号には他の旧師のことを書くつもりとの御返事。私も大分前の号に岡村、小黒、丹羽、小室、小田島諸先生を書いたが、阿部さんの次号を今から期待している。そこで今回は当時の生徒生活面の思い出を書くことにした。

私共の在学時代（大正五年―十年）の頃は、母校には「遠足」とか「修学旅行」などはなく、もっぱら「山登り」が春秋二回、しかも日帰りの強行軍だった。翌日は休業どころか授業で、痛い足をひきずって登校したものだった。したがって宿屋に泊った記憶がない。ただ二回だけ宿泊したことを覚えている。四年生頃の「山登り」で郡部の何とかいう山に登り、その夜は加茂農林学校の実習期間中使用する寄宿舎が空いているのを使用させて頂いた事と、軍艦香取、鹿島が新潟港に寄港した折、どちらかの軍艦に便乗させてもらって佐渡に渡ったことがあった。島内の名所旧蹟の見学は遊覧バスなどない頃とて、もっぱら徒歩。カメラなども普及していなかったから絵の上手であった加藤君などはスケッチするのに手間どり、遅れがちであった。相川で所謂「宿屋」に泊ったが、軒灯に「旅人宿」と書いてあった。夕食後女中さんが歌ってくれた「おけさ節」は正調そのもので、旅愁をそそるものがあった。当今行われている「佐渡おけさ」とは歌詞がちがっていたようで、第一節は「佐渡へ佐渡へと草木もなびくよ、佐渡は四十九里、波の上」ではやし言葉などなかったようであった。二節目かに「好いた仲とて他国の人はよ、末はカラスの泣き別れ」は少年後期の年頃の私共に「恋の悲しみ」と言ったものを感じさせた。「山登り」が終ると必ず作文を書かされたが私などは無味乾燥なものしか書けなかった。その中で、今でも忘れられないのは、小松勇君（？）の弥彦登山記で、越後鉄道に乗っていったが、各駅の名を、当時国語の授業でならった「道行文」を巧みに用いて「過ぐる内野や曽根の里……」の部分は今も覚えている。この作品は勿論「遊方会雑誌」に掲載されていた。「遊方会雑誌」は年一回全校生に配布されたが、初めて手にした時「遊方」の意がわからなかったが、高学年になって、出典は論語里仁の「父母在せば遠く遊ばず、遊べば必ず方あり」であることを知った。今から見れば明治色ゆたかな誌名が示すが如く、内容も堅いものばかりで、生徒の作品も作文の時間に書かされたものが多く、校長の武辞とか、先生の漢詩などで、あとは部活動の報告のようなもので、田村（？）先生にえらばれて清書して提出した私の作文も「新年の決意」と言ったような感想文であった。その間に特別寄稿のものが一篇あって多分先輩の作であったろうが「北海道のトラピスト」に関する詩情豊かなものや、旧制新潟高等学校初代の校長八田氏の息子で東京から転校して来た同期の八田君の、「薫香録」（？）と題した感傷的な感想文がやや文芸味をそえていた位のものだった。当時の母校は、「尚武の風はスパルタの」の面、即ち運動部の面が強調され、「学びのわざはアヂンスの」の文芸面は軽視されていたようだ。しかし文芸愛好者がなかったわけでない。

（以下次号につづく）

昭和55年度青山同窓会収支決算書（自昭和55年4月1日 至昭和56年3月31日）

収入の部

科目	決算額	備考
繰越金	250,851	前年度繰越金
入会金	865,600	1・年生 800円×450人＝360,000円 2・3年生 400円×890人＝355,600円 通信 1,200円×125人＝150,000円
会費	3,001,000	同窓会年会費1口 1,000円
雑収入	27,346	預金利子
合計	4,144,797	

支出の部

科目	決算額	備考
人件費	1,919,473	職員1人給料手当・社会保険料
通信費	440,545	会報発送・総会・役員会・新年会案内郵便料 振替料負担金
印刷費	89,500	封筒・振替用紙・予算・決算・案内状印刷代
慶弔費	32,100	会員慶弔電報料・香華料・離任職員餞別
退職積立金	50,000	
諸費	4,820	消耗品費等
会報印刷費	322,000	年2回発行会報印刷代
会議費	176,508	総会・新年会・役員会・会議費・東京役員本部総会出席旅費・東京総会・支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	145,000	卒業生におくる湯のみ代
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	201,500	通信制同窓生会費納入者1人 500円 403人分 通信同窓会へ補助金として繰出
予備費	50,000	東京同窓会補助金
合計	3,511,446	

収支差引残高 633,351円

残高処分内訳
400,000円　90周年記念事業準備金として積立
233,351円　次年度へ繰越

昭和56年4月6日
上記の通り相違ないことを認証致します。

監事 福山　健 ㊞
監事 沢山　巌 ㊞

昭和56年度青山同窓会収支予算書（自昭和56年4月1日 至昭和57年3月31日）

収入の部

科目	予算額	備考
繰越金	233,000	前年度繰越金
入会金	923,000	1年生1人800円×450人＝360,000円　3年生1人400円×440人＝176,000円 2年生1人600円×445人＝267,000円　通信制 1,200円×100人＝120,000円
会費	2,700,000	同窓会年会費1口 1,000円
雑収入	5,000	預金利子
合計	3,861,000	

支出の部

科目	予算額	備考
人件費	1,900,000	職員1人給料・手当・社会保険料
通信費	600,000	会報発送・総会・新年会・役員会案内郵便料 振替料負担金
印刷費	100,000	封筒・振替用紙・予算・決算・案内状印刷代
慶弔費	50,000	会員慶弔電報料・香華料・離任職員餞別
退職積立金	50,000	
諸費	11,000	消耗品費等
会報印刷費	370,000	年2回発行会報印刷代
会議費	250,000	総会・新年会・役員会・会議費・東京総会・支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	160,000	
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	150,000	通信制同窓生会費納入者1人 500円 300人分 通信同窓会へ補助金として繰出
予備費	140,000	
合計	3,861,000	

クラス会特集

在京44期生の集い

一〇月二二日午後六時、新橋、料亭「美々卯」に於いて四四回卒の同期会を催す。

折からの台風のため出席を危ぶまれたが、夜隠庭前より忍び寄る頃、三々五々篠つく雨をついて、予定どおり一八名踵を接し集い来る。二年振りの会合とて「おっ、「ようっ」と互いに健在の情を交わすうち、斎藤正義の司会に進行す。乾杯に引続き献酬重なる頃合いをみて、新顔の自己紹介より始める。

先ず往年の美童の面影未だ失せやらぬ君島日出男、つづいて、かつての弁論の雄、今や教授の重厚さを具えた寺田由永、戦前戦後の苦労を交々語る藤井松一郎、中学時代からの変り種、美校卒後一貫してその道に勤しむ広川勇一郎、長髪蓬々一見判別に苦しむ程、変貌著しきは、前橋より馳せ参じた伴敬。

又、開会のたびに遠路を問わず新潟よりかけつける小林璋吾の、『あいつは、死んだ、あれは未だ生きている』に始まる新潟在住の同級生の消息を、手拍子よろしく語る姿に満場の洪笑は爆笑を呼ぶ。実にこの席この興に欠くべからざる得難き良き友なり。

献酬重なるにつれ往年に還り、口角泡を飛ばし、蛮声昔に変らず『若いなあ』とか『さっぱり変っていないなあ』などと互いに世辞を振り播けど無分別に喜ぶ齢はとうに過ぎ、一同還暦から古稀への道程を辿る輩、アノ方は何れも自信喪失の域に在らんと覚ゆ。

歓未だ尽きざるに、お時間ともなれば、次回を約し散会す。

（尚、設営に当り斉藤正義のご苦労を謝し、かつ新潟より「越の寒梅」をブラさげてきてくれた小林璋吾、又風雨の中を厭わず参会されたご一同に深く感謝いたします。水野）

（敬称略）

参考までに

開会通知発送数――二四通
出席通知――一八通
欠席通知――一三通
出欠何れも返事なし――三通

48回岩室で気勢

吾が四十八期会は卒業後今年が丁度、満四十周年の記念すべき年であり、十月十七日、岩室温泉高島屋で十八名が集まり、年一回の楽しい会合をした。朝より、同期大谷君が支配人をしている新潟カントリークラブでゴルフを楽しんだ。軽口をたたき、プレッシャーにしたりされたり。それでもしつけのよいミセス・キャディーのおかげで、グロス94で阿部君が優勝し、準優勝は高木君と、みな奮闘した。

六時より懇親会は開会。大橋幹事の開会の挨拶につづき、大塚(進)幹事長より、四十八期の会員消息、近況報告があり、又、明年九十周年を迎える母校の寄附について要請があった。一人六千円、四十八期全体で二十五万の募金目標に対し会員一致して協力することを申合せた。そして欠席会員には幹事長が文書でお願いすることにきまった。其後、遠く横浜より参加の安斎君、富山よりの吉沢君の音頭で、元気溌剌の乾盃で開宴した。会員が一人づつ自己の近況三分間スピーチをしたが、爆笑また爆笑で楽しいムードいっぱいである。

そして岩室の代表的美人姐さんによる岩室甚句や岩室踊の披露があり、酒量は大いにあがる。大宴会は例年より時期を繰上げたことや翌日が日曜の大安で婚礼出席組が多く、そして多忙な年代のせいで例年より参加が少し減ったことと、折柄の岩室美妓の鑑賞眼も久方ぶりの会合で、懇談が先になり、色が薄れたことは止むをえないことであった。

然し、レイロウノテン、タダニチヲモル、アオヤマアオヤマ、オートットット、オットット、と大塚幹事長、大橋幹事のたくみなリードで大いにボルテージが上り、八時過ぎまで、青山健児は若い十代の青年にかえって、盛んなる気勢をあげた。

又、夜半の麻雀会は、金脈は細けれど、大塚君の優勝。鶴巻・川島君が他を圧し、朝の三時過ぎまでの大熱戦であった。

明朝九時二十分、又来年会う日まで、母校九十周年記念の寄附が大いに上がらんことを期して、東へ西へと散会した。（南緑八郎記）

56回 在京 青山同窓会

（56・7・24夜）

第四銀行横浜支店長として昨年二月単身赴任した栗林君を歓迎慰労し、併せ同志の納涼会をと急ぎ企画された、みなとヨコハマ氷川丸納涼会に、新潟高校同級の荒川・宗村・佐藤(豊)、ピアノバー荒し?の高橋・赤坂・市川・木村・川田・佐藤(幸)・小島・浅能・指宿・赤坂・三崎、カラオケバー荒し?の小林・建部・中山、筆の立つ塩見・山城の十九名、氷川丸一等ダイニングサロンで会費以上の接待で一同満足、お定まりの応援歌・校歌（中学の）を斉唱し、オープンデッキのビアガーデンを惜しげにのぞいて一同元気で又会う日を願って解散した。

（文責・佐藤豊）

出席者

大塚進弥　大橋明自　五十嵐皓太
倉島亮一　阿部慶二　諏訪　宏
南緑八郎　大谷一男　鶴巻倹介
天田孝平　安斉　正　戸川喜代一
川島由郎　吉沢宏英　内藤啓一

通行手形持参の老師あり

38回　近藤　圓

復活第五回渋柿会（新中寄宿舎同人の集まり）を去る十月第一日曜日に、新潟の小甚旅館で開催した。小甚旅館はご存知、三十五回の小山久一さんの旅館で、名苑を持つ市内屈指の格調の高い老舗である。会員も丁度氏と二～三年の先後輩とて、格別に歓待して下され、仲秋の半日を参会者十四名、少年時代の思い出を語り合い楽しんだ。何分老齢者の集まりとて、夜間外出は無理という人も出始めたので、今回から昼間とし正午開会とした。

昼ならばと初参加の豊栄市高森新田の安楽寺住職、佐々木勧さんが一番乗りをされた。何十年ぶりで会う人もあり、顔がわからず氏名詐称と怪しまれないためとて、「通行手形」と称し、舎生一同で写っている、古色蒼然とした写真を持参された。さすがに老師ともなると用意周到なるもの哉と皆々敬服。その写真を見た面々、己が美少年ぶりに感嘆したり、老醜ぶりに慨嘆したり。中におかしかったのは川村欽治さん、どうした訳か自分が写っていない。いやそんな筈はないと一悶着。皆で当時を思い起こしながら探したら、端っこに可愛い顔をして畏まっている。人に探してもらわなくてはわからんとは六十年の歳月は恐ろしいもの。佐々木老師の通行手形で開宴前、旧友の思い出話で一花咲かせたとは初参加ながらその功徳、善根は殊勲賞ものであった。

残念だったのは会の名付親で、会長格の永井行蔵さんの欠席だった。同氏の恩師で新大の名誉教授巣山菊二先生の葬式と重なったためで、何分予定外のこととて如何ともしがたく、中心人物のいない会はいささか物足らない思いであった。

時のたつのも忘れて歓談し、三時半、又来年の十月第一日曜の再会を約して散会した。

出席者を写真にて紹介（数字は卒回）

前列右から

近藤百之（35元高校長・相模原市）
内田善衛（35元中学校長・吉田町）
丸山英一（36歯科医・与板町）
川村欽治（33元第四銀行重役・新潟市）
富所太三郎（36元県農協中央会副会長・吉田町）
佐野賢一郎（33元新潟交通重役・新潟市）
丸岡　寛（36開業医・水原町）
佐々木　勧（33安楽寺住職・元中学校長・豊栄市）

後列右から

細野哲雄（38清泉学園短大教授・長野市）
河内正彦（37開業医・中条町）
山田利平次（36元新潟市民政部長・新潟市）
近藤　圓（38ピコイ白蟻研究所常務・新潟市）
武田慎三郎（35元中学校長・新潟市）
皆川良一（38加茂市長・加茂市）

59回 われら集えり 卒業30周年

例年になく早い寒波の訪れ、頬をなでる風もつめたい。

十一月十四日（土）夜の帳がすっぽりと街を包む頃、三十年前の旧懐をかみしめながら会場イタリア軒に急ぐ。シャンデリアの誇らしげな光の下、参集せるわれら青山同窓会五十九期生百十名。さしもの広いサンマルコも立錐の余地なし。

渡辺幹事の司会のもと、物故会員の冥福を祈り、関根幹事長が久濶を述べ、ついで伊佐幹事より、本会開催までの経過についての詳細な説明があった。この間の幹事のご苦労に深甚なる謝意を表す。

ご参席くだされた先生方は、川口先生・佐野先生・田辺先生・立間先生・井上先生・関口先生、相変らぬ矍鑠たるお姿に接し、懐しさも倍増。三十年の古きを思い出され歓談。川口先生より『白頭掻更短、渾欲不勝簪』という杜甫の「春望」の一節は、わたくしごとき老年の人のこと、諸君等は昔と変らぬ青春の真っただ中』とハゲマシのおことばがあった。

やがて京都の遠方より馳せ参じた渡辺敏男君の乾盃の音頭で宴に入る。同時により抜きの美形参上、意気大いにあがる。

「いようー」、「やあこんにちわ」「あっきゃ！　おめぇ、あめたなあ」、「うーんと」、「えー」、最初は記憶をたどるもどかしさもあったが、すぐに五本松の校庭、木造の教室でのやりとりに立ち戻る。

かつてラクダ（砂上を重荷を背負うて苦労した）の時代を経、今社会のよきリーダーとして崇高なる獅子（あのおとなしいラクダが砂漠で突然龍に襲われるや、たちまち獅子と変じて追い散らす）の時代を迎えたのである。ラクダの如き忍耐、戦後の欠乏・混乱の時代に高校時代を送ったわれら、現代のけばけばしい、虚飾に満ちた社会に敢然として立ち向かう獅子と化したのである。われら一同さらに結束を固め、飛躍を遂げるにふさわしい盛会である。

テーブルごとの集団自己紹介・近況報告と続き万感交々、尽きせぬ興趣に溢れる。以下筆に尽くし難い雰囲気。「四年経ったらまた会いましょう」を合い言葉とし、万歳三唱のうちに、それぞれが、腕白時代を懐しみ夜の巷に思い思いに散っていった。

来年は母校九十周年、記念事業費の一部にと集った金額も、予定を遥かに超えた。母校の益々の発展を祈念し、お互いの健康と幸せを祝福し合って散会した。

（中野文郎記）

36会 短信

◎古希を迎えた三六会員は、昨年九月十三日、君健男君をはげます会と加賀田二四夫君の県議会議長就任祝賀会を開催。

東京からの水戸良也君を含め、二十五名参加。七〇才とは思えぬ元気さで酒をくみかわし、お互いの健康をよろこび合った。

なお昨年の生存者叙勲の栄に浴した会員は左記のとおり。

久保（森）文苗君、針貝信吉君、風間忠雄君。

編集後記

◎90周年を迎えて新しい年の夜明け、皆様には、いかがなお正月でしたか。編集子には、暮れから正月にかけて、この新年号会報をどのような紙面でお届けするか、少し頭の痛いことでした。

◎オークラホテルを会場に、二度目の総会について、幹事長より報告の記、簡にして要を得て、さすが、と感じさせられました。もっと写真を多くと思ったのですがスペースの関係で残念。

◎野球部の県大会優勝は、久々に我ら同窓の血をわかせた快事でした。願わくば90周年の番外記念事業として、今夏、全国の校友甲子園で会いましょうと行きたいものです。一層精進健闘を！

◎野球部OB大越君、水泳部大先輩平田氏のご寄稿に感謝致します。数多い、各部先輩方の思い出やら、現役各クラブの活躍等々を紙面でご紹介できる様、各位のご協力をお願いします。

◎クラス会写真の大小は専ら割付の都合。当りはずれの段お許しを。各期の短文付写真報告を多くのせたいので、ぜひご協力を！

◎水泳部平田氏、思い出さまざまの海潮音氏、共に長文の原稿のため、一部次号にまわりました。

◎ご投稿と、紙面の読後感などを編集部にお寄せ下さい（石田）

期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名
一郎　修子介　子正諒	稔久彦一進　明親弥	正雄之　行久昭一治	74回	憲郎明　士二実修一	吉田芳郎	寺尾　綾輝隆治	西山克尚学	佐々木崇
誠和　尚濱	月　鉄英	俊克正　義　正幸	文　紀	高橋秀一	76回	中村直昭憲	古川	佐藤友映
田林田山辺	ケ野山村下	藤川羽	馬田野泉上垣木田	関　憲	石田芳徳昭	古間蘭島	81回	85回
新平山横渡	三中丸中山	斎立丹	相上上和川島鈴藤	田中秀	熊木野	石鈴	中野ますみ	大塚聡
秋菅滝	井栗渡	73回	夫隆夫潤耕男紀己	75回	牧野昭	扇	83回	通信制
		荒木黒口間野		加藤勝士	78回	嘉明	神田高志	255名
		石樋本中		斉藤謙	五十嵐俊英	井智裕	古川	
				福藤田本	高寺尾	木雅	84回	
				塚堀		80回	小林正明	

期及氏名

大高道夫
大塚明子
笠原修
桂川崎昌弘
川崎彦
菊池紘
北村晴夫
斉藤久美子
白井節
杉山直久
菅沼登
関口光治郎
関根昭一
高橋信夫子
滝田由紀
玉木明
鶴賀政行
堂垣内弘一
中野仁
永井健司
西田美代子
広野達彦
福山忠昌
星文子
前田邦建光
松田井吾
三国陽夫
三国良彦
皆山田十市
屋代順治郎
横木正幸
吉田裕之
和田信夫
渡部透
山口文
山山際肇

68回

赤塚五十二
板垣昭男
岩原修爾
駒林進四郎
斉藤忠雄
渡辺泰彦
上村晃一
北村泰作
小林和子
小林喜代子
田中光弥
土田正
宮尾益征

69回

石本隆太郎
伊藤治子
入山哲郎
大森ゆかり二
小林昌敏
小町聡子
佐藤隆輔
佐藤要教
高橋義睦
田宮吉一
敦栃宗浩
中倉保達
原綾子
樋浦泰次郎
皆川菊夫
山下山嘉夫
横若謙一
本村郁夫

70回

大塚哲夫
小川瑞枝
小林紀昭
近藤光男
斎藤弘道
伊藤善允
笠原本仙
杉本大義
森井正滋
村田紀夫
田辺山豊
外山雅一

期及氏名

繁昭男
横田美
和田和

64回

内海公子
内山武夫
風間志郎
小田島寿一
川崎陽一
佐藤幸彦
斎木井俊
坂井名睦
椎本本暉
塚本木睦
高庭山畑晋
森星浩
松原迪也
山根伸通
山崎雅満
山内夫之
渡辺和司
渡部稔
渡辺義篤

65回

安宅厚
石岩田郎
入野山郎
小沢征郎
小泉達夫
大崎一治
大堀隆
笠原成
尾崎
斎藤輝
三林奈
三林美聡
三白井三徳
富永谷也
中谷一
寺崎武
伏見勝

66回

小川亮一
小畑志津子
風間聡子
加藤孝一
片加藤山子
加藤勝真
小林啓志
下川友也
鈴木隆
鈴木興
関木篤
竹石健
坪井清春
西本靖司
橋本本一
橋本廉
原田利
福地岡
丸三浦喜
三山口田
富田幸
福田栄
渡辺田
渡辺尚
矢瀬
横崎
山崎
吉田六左エ門

67回

岡崎功
君英夫
小林晋一
小沢田俊一
高倉亨
仲村真
西樋山夫
星木尚一
石井允
伊藤俊
今泉明
今紀作

期及氏名

三彦毅円一
木幸喜蔵
木泉崎彰
茂島根橋陽
関高橋勇二
高山昇
高見山諒
竹谷博
花井三
樋野
広由
藤早川哲
藤原幸
堀川本兵
松山崎徳左ェ門
山宮英一
山田川
山辺友
山辺辺
渡辺幸

60回

阿部明秀一
有石川紀一邦
五十嵐
市村
入上山文
上内山雅
大岡田真
奥村嘉
金田英
櫛谷常二
熊倉不
熊谷正
小出
小小林
小小林智
小小林武
小小林進一
小小林賢
小小田
小高野信
坂井丈
斉藤守
斎藤中卓
田木亀
玉中文
野村保
長谷川信
橋本行
秦篤
福田
星野
本水田
渡辺義
山崎勝
渡辺公
吉田栄

61回

浅間道
赤塚謙
赤堀和
石井壮
池田元
池田良
池田藤
伊塚慶
伊居江
大口矢
大加藤
川田栄
小川崎
岸田賢
近藤
小小林
小小林
近藤

期及氏名

佐々木繁
佐藤真武
佐条和夫
佐藤明
塩谷栄
清水淳照
高橋正三
鈴木理
関根三
長谷川享一
長谷川康一郎
知野健明
長谷川義広
日暮靖
藤井真夫
藤田淑靖
藤本間人
松尾通彰
丸嶋浩
矢田夫
村田鮫
村本和熟
山辺義
山部稔
渡辺

62回

荒木貞至
石川浩
石黒恒
井上泰二郎
上原明
大谷巌
大石田寛
神加成蘭一
加藤美明
小池健治
河野開
木村亮
近藤哲朗
佐藤武司
佐藤晃一郎
佐藤誠
佐藤民司
白井谷稔
新橋健一
高田次郎
田村貫誠一
滝沢寿美子
立川国臣
中西政明
丸田宥熟
原堀正吉
三浦栄雄
守口愛
結城隆
渡辺俊
山崎市
山崎敬

63回

阿部達
赤羽良樹
浅野康一
伊南純雄
和泉修治
薄田聡
江口律
大崎正
小畑忠
小野塚淳
大堀道
斎藤勝
佐藤博
佐藤正
佐倉至
白木三
鈴木一
滝沢正
滝田浩
土屋信
土井田一
戸井恒
中村尚
中平欣
藤井義
福住晃
水落
緑川

期及氏名

横田昭男
和田

64回

内海公子
内山武夫
風間志郎
小田島寿一
川崎明
佐藤陽一
斎木幸彦
坂井睦
椎名暉
塚本睦
高木山
庭山晋
畑野浩
森星
松原迪
山根伸也
山崎雅通
山内満
渡辺夫之
渡部和司
渡辺稔篤

65回

安宅厚
石田郎
岩野郎
入山郎
小沢郎
小泉夫
大崎治
大堀夫
笠原美
尾崎元
斎藤彰
三林輝夫
三林美奈子
三白井三雄
富永聡
中谷泰
寺崎徳
伏見勝也

66回

小川亮一
小畑志津子
風間聡
加藤孝
片加藤真子
加藤勝志
小林啓也
下川友隆
鈴木春
鈴木興司
関篤一
竹石健
坪井清
西本靖
橋本本
橋本廉
原田利
福地明
丸岡央
三浦哲
三山口康
富田喜枝
福田幸子
田村栄光
渡辺正男
渡辺尚弘
矢瀬功
横崎
山崎
吉田六左ェ門

67回

岡崎功夫
君英一
小林晋一
小沢田俊亨
高倉真
仲村芳夫
西樋山一
星木尚允
石井俊
伊藤紀明
今泉信

期及氏名

大高道夫
大塚明子
笠原修
桂川崎昌弘
川崎彦
菊池紘
北村晴夫
斉藤久美子
白井節
杉山直久
菅沼登
関口光治郎
関根昭一
高橋信夫子
滝田由紀
玉木明
鶴賀政行
堂垣内弘一
中野仁
永井健司
西田美代子
広野達彦
福山忠昌
星文子
前田邦建光
松田井吾
三国陽夫
三国良彦
皆山田十市
屋代順治郎
横木正幸
吉田裕之
和田信夫
渡部透
山口文
山山際肇

68回

赤塚五十二
板垣昭男
岩原修爾
駒林進四郎
斉藤忠雄
渡辺泰彦
上村晃一
北村泰作
小林和子
小林喜代子
田中光弥
土田正
宮尾益征

69回

石本隆太郎
伊藤治子
入山哲郎
大森ゆかり二
小林昌敏
小町聡子
佐藤隆輔
佐藤要教
高橋義睦
田宮吉一
敦栃宗浩
中倉保達
原綾子
樋浦泰次郎
皆川菊夫
山下山嘉夫
横若謙一
本村郁夫

70回

大塚哲夫
小川瑞枝
小林紀昭
近藤光男
斎藤弘道
伊藤善允
笠原本仙
杉本大義
森井正滋
村田紀夫
田辺山豊
外山雅一

期及氏名

一治之甫男
一一孝雄策太
一松郎寛男
欣次郎郎雄
欣慎俊
小近佐
笹斎真
須田
田千西
波藤藤
藤細堀
村山百

52回

青秋道秀
阿部東村
安崎
稲川
礒村
石乙上
折加
河川
北斎
斎藤
斎藤
斎坂
佐佐
佐佐
佐佐
塩
椎白
真鈴
関関
武高
田高
高津
筑富
中永
長長
丹野
長早
広広
本本
皆宮
宮村
森森
山崎
湯吉
吉渡

53回

飯野
一石
稲月
遠岩

期及氏名

吾衛弘夫
憲忠輝信
倉合林
大河神
川菊久
小笹篠
鈴高
玉野
橋前
増高
高山
広広
桝宮
宮正
山渡

54・55回

浅妻昭三
伊藤哲郎
伊藤健三郎
梅沢竹太郎
大塚久雄
大橋定造
大逢坂修雄
貝津貫一郎
片岡啓郎
片桐武
金山隆
桑小林一
小小林
小小和
斉藤健
笹佐哲
佐渋正
庄木
真司
真谷正
鈴藤
砂木
清山
早野
高橋
高井
土田達
常木
寺崎哲
等力和
中山義
仁野半
多見
野崎誠
長谷川直
保倉
星井正
松本明
宮尾益
前田利
松浦
三村一義
山田源
山田際淳
吉原賢
和田迪

56・57回

阿部弘昭
飯島昌
井上幸
市川久
池田兆
市今千
今岩忠
今岩玲
岩崎信
岩渕信

期及氏名

郎孝衛策夫谷彦郎衛平也郎豊恒一三一寧彦平吉雄彰顕男介郎介郎二彦二夫一男剛五三光

58回

士雄五哉平治良郎弘垣章一一浩一男吾郷吉茂夫男昭勝教宏

59回

造造男一郎夫一雄健三駿彦夫明夫雄一進甫行悌晴紀克道一純

七
坂保善吉弘端一一一直源太謙戎静恒宇勝哲正泰四健六諦昭健長正正昭順正
逢久戸藤田田田健島村藤隆見谷木部沢塚原川島由井藤河山井野山崎川黒井川田
大折加岡織小笠籠木近小佐斎残塩塩鈴建滝高高中中中藤堀並庭花伴星丸三皆目松村吉

58回

青浅石植歌遠大大加清木斉坂曽種田高平福藤松丸宮宮矢行

59回

安伊五飯牛小大岡大神笠菊倉倉小笹佐佐重

期及氏名

三木泉茂島関高高高竹谷花樋広藤早藤堀松山山山渡渡渡
有石五市入上大岡奥金櫛熊熊小小小小小小小小小高坂斉斎田玉中野長橋秦福星本水渡山渡吉
浅赤赤石池伊居江大加川小川岸近小小近

期及氏名

佐々木繁
佐藤真武
佐条和夫
佐藤明
塩谷栄
清水淳照
高橋正三
鈴木理
関根三
長谷川享一
長谷川康一郎
知野健明
長谷川義広
日暮靖
藤井真夫
藤田淑靖
藤本間人
松尾通彰
丸嶋浩
矢田夫
村田鮫
村本和熟
山辺義
山部稔
渡辺
渡部和
渡辺義篤

62回

荒木貞至
石川浩
石黒恒
井上泰二郎
上原明
大谷巌
大石田寛
神加成蘭一
加藤美明
小池健治
河野開
木村亮
近藤哲朗
佐藤武司
佐藤晃一郎
佐藤誠
佐藤民司
白井谷稔
新橋健一
高田次郎
田村貫誠一
滝沢寿美子
立川国臣
中西政明
丸田宥熟
原堀正吉
三浦栄雄
守口愛
結城隆
渡辺俊
山崎市
山崎敬

63回

阿部達
赤羽良樹
浅野康一
伊南純雄
和泉修治
薄田聡
江口律
大崎正
小畑忠
小野塚淳
大堀道
斎藤勝
佐藤博
佐藤正
佐倉至
白木三
鈴木一
滝沢正
滝田浩
土屋信
土井田一
戸井恒
中村尚
中平欣
藤井義
福住晃
水落
緑川

期及氏名

横田昭男
和田

64回

内海公子
内山武夫
風間志郎
小田島寿一
川崎明
佐藤陽一
斎木幸彦
坂井睦
椎名暉
塚本睦
高木山
庭山晋
畑野浩
森星
松原迪
山根伸通
山崎雅満
山内夫之
渡辺和司
渡部稔
渡辺篤

65回

安宅厚
石田郎
岩野郎
入山郎
小沢郎
小泉夫
大崎治
大堀夫
笠原美
尾崎元
斎藤彰
三林輝夫
三林美奈子
三白井三雄
富永聡
中谷泰
寺崎徳
伏見勝也

66回

小川亮一
小畑志津子
風間聡
加藤孝
片加藤真子
加藤勝志
小林啓也
下川友隆
鈴木春
鈴木興司
関篤一
竹石健
坪井清
西本靖
橋本本
橋本廉
原田利
福地明
丸岡央
三浦哲
三山口康
富田喜枝
福田幸子
田村栄光
渡辺正男
渡辺尚弘
矢瀬功
横崎
山崎
吉田六左ェ門

67回

岡崎功夫
君英一
小林晋一
小沢田俊亨
高倉真
仲村芳夫
西樋山一
星木尚允
石井俊
伊藤紀明
今泉信

期及氏名

大高道夫
大塚明子
笠原修
桂川崎昌弘
川崎彦
菊池紘
北村晴夫
斉藤久美子
白井節
杉山直久
菅沼登
関口光治郎
関根昭一
高橋信夫子
滝田由紀
玉木明
鶴賀政行
堂垣内弘一
中野仁
永井健司
西田美代子
広野達彦
福山忠昌
星文子
前田邦建光
松田井吾
三国陽夫
三国良彦
皆山田十市
屋代順治郎
横木正幸
吉田裕之
和田信夫
渡部透
山口文
山山際肇

68回

赤塚五十二
板垣昭男
岩原修爾
駒林進四郎
斉藤忠雄
渡辺泰彦
上村晃一
北村泰作
小林和子
小林喜代子
田中光弥
土田正
宮尾益征

69回

石本隆太郎
伊藤治子
入山哲郎
大森ゆかり二
小林昌敏
小町聡子
佐藤隆輔
佐藤要教
高橋義睦
田宮吉一
敦栃宗浩
中倉保達
原綾子
樋浦泰次郎
皆川菊夫
山下山嘉夫
横若謙一
本村郁夫

70回

大塚哲夫
小川瑞枝
小林紀昭
近藤光男
斎藤弘道
伊藤善允
笠原本仙
杉本大義
森井正滋
村田紀夫
田辺山豊
外山雅一

期及氏名

原猛夫
林文元
林弘博郎一
藤藤芳甚郎
舟崎裕二郎
堀内憲正
本丸田弘
柳山生茂
渡崎部松武生

50回

安宅恵一也
石池田卓徳
五今井成夫
岩井勝十真司
海沢信郎
枝老名正夫
岡村田道平
大石正務
大津卓信
大逢坂秀匡
勝上村光司
川苅太郎
木部洋右
木黒熊左
熊曽倉玉
倉斎藤宗恒
佐々木良一郎
佐々木雄
佐渋谷悦武
井谷善郎
大高黒誠
高善橋忠
竹之内逢
鶴田勇
時田秀寛
寺本洋夫
根村一
中村施郎
橋川
長谷川陽三
長谷川健作
原田場敏雄
馬一柳賢
藤井俊
布施義
堀川信
前田久
丸山久
山山川
山田岸
山山芳

51回

厚地武
赤井貞彦
池田正司
歌川正博
永木昭治
大川雄六宏
大小黒昭策郎
小野芳一
落合本毅
岡井耕治
笠島幸
鹿山新
勝原仰
笠唐沢浅
北村熙
川瀬名
桑宮熙
小

期及氏名

郎孝衛策夫谷彦郎衛平也郎豊恒一三一寧彦平吉雄彰顕男介郎介郎二彦二夫一男剛五三光

58回

士雄五哉平治良郎弘垣章一一浩一男吾郷吉茂夫男昭勝教宏

59回

造造男一郎夫一雄健三駿彦夫明夫雄一進甫行悌晴紀克道一純

七
坂保善吉弘端一一一直源太謙戎静恒宇勝哲正泰四健六諦昭健長正正昭順正
逢久戸藤田田田健島村藤隆見谷木部沢塚原川島由井藤河山井野山崎川黒井川田
大折加岡織小笠籠木近小佐斎残塩塩鈴建滝高高中中中藤堀並庭花伴星丸三皆目松村吉

58回

青浅石植歌遠大大加清木斉坂曽種田高平福藤松丸宮宮矢行

59回

安伊五飯牛小大岡大神笠菊倉倉小笹佐佐重

期及氏名

三木泉茂島関高高高竹谷花樋広藤早藤堀松山山山渡渡渡
有石五市入上大岡奥金櫛熊熊小小小小小小小小小高坂斉斎田玉中野長橋秦福星本水渡山渡吉
浅赤赤石池伊居江大加川小川岸近小小近

期及氏名

佐々木繁
佐藤真武
佐条和夫
佐藤明
塩谷栄
清水淳照
高橋正三
鈴木理
関根三
長谷川享一
長谷川康一郎
知野健明
長谷川義広
日暮靖
藤井真夫
藤田淑靖
藤本間人
松尾通彰
丸嶋浩
矢田夫
村田鮫
村本和熟
山辺義
山部稔
渡辺
渡部和
渡辺篤

62回

荒木貞至
石川浩
石黒恒
井上泰二郎
上原明
大谷巌
大石田寛
神加成蘭一
加藤美明
小池健治
河野開
木村亮
近藤哲朗
佐藤武司
佐藤晃一郎
佐藤誠
佐藤民司
白井谷稔
新橋健一
高田次郎
田村貫誠一
滝沢寿美子
立川国臣
中西政明
丸田宥熟
原堀正吉
三浦栄雄
守口愛
結城隆
渡辺俊
山崎市
山崎敬

63回

阿部達
赤羽良樹
浅野康一
伊南純雄
和泉修治
薄田聡
江口律
大崎正
小畑忠
小野塚淳
大堀道
斎藤勝
佐藤博
佐藤正
佐倉至
白木三
鈴木一
滝沢正
滝田浩
土屋信
土井田一
戸井恒
中村尚
中平欣
藤井義
福住晃
水落
緑川

期及氏名

横田昭男
和田

64回

内海公子
内山武夫
風間志郎
小田島寿一
川崎明
佐藤陽一
斎木幸彦
坂井睦
椎名暉
塚本睦
高木山
庭山晋
畑野浩
森星
松原迪
山根伸通
山崎雅満
山内夫之
渡辺和司
渡部稔
渡辺篤

65回

安宅厚
石田郎
岩野郎
入山郎
小沢郎
小泉夫
大崎治
大堀夫
笠原美
尾崎元
斎藤彰
三林輝夫
三林美奈子
三白井三雄
富永聡
中谷泰
寺崎徳
伏見勝也

66回

小川亮一
小畑志津子
風間聡
加藤孝
片加藤真子
加藤勝志
小林啓也
下川友隆
鈴木春
鈴木興司
関篤一
竹石健
坪井清
西本靖
橋本本
橋本廉
原田利
福地明
丸岡央
三浦哲
三山口康
富田喜枝
福田幸子
田村栄光
渡辺正男
渡辺尚弘
矢瀬功
横崎
山崎
吉田六左ェ門

67回

岡崎功夫
君英一
小林晋一
小沢田俊亨
高倉真
仲村芳夫
西樋山一
星木尚允
石井俊
伊藤紀明
今泉信

昭和56年度青山同窓会費納入者

（4月より12月25日まで納入済のもの）

未納の方は3月までに納入下さるようお願い致します。

（郵便振替口座　新潟4455青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　275210青山同窓会）

会費納入のお願い

年会費　1口 1,000円

できるだけ1人2口でおねがいします。

納入先　新年会・総会の会場
又は母校同窓会事務局へ

10回
小柳篤二
山宮英二
渡辺浩太郎
玉木繁治

18回
鷲田徳雄

19回
鍵富清一郎

21回
古田幸三郎
水沢嘉一郎
吉田武四郎
若杉吉五郎
山口吉次郎

22回
近田助治郎
中沢信吉

23回
佐藤俊次
清水浩一
土屋哲二郎
西山辰蔵

24回
樋口政和

25回
真保吾一
長野善三

26回
伊藤威夫
苅部信雄
木村耐七
桑原自疆
根布義雄
永井信次
長野昌隆

27回
内山惇一
斎藤澄一丸
奥田静雄
田中中市助
田中英一
水上卯一吉
真壁喜三郎

28回
阿部藤策
坂井義衛
大谷鐘吾
小原武一郎
小林十一郎
塚田武雄
野村治三朗
早山洪二郎
藤井清
松浦茂路
松田安懐
村田凡愛
水野鉉三
山崎安平

29回
朝倉良三
石崎重郎
伊藤洵治
太田久雄
北村太郎
田村文三郎
徳永興次郎
松井達夫
武藤経世

30回
伊藤敬太郎
岩瀬富士
上原勝次
遠藤種雄
倉品克一郎
湊元克巳
中居直二
南宏

山添直
山宮英二
渡辺浩太郎
鷲田徳雄

31回
浅海勝治
岩田孝三
佐藤吉次郎
田村一也
名倉清
中熊清
本多深応
松井道夫
村田忠夫
守口東平
山下大蔵
渡辺勝男
渡辺豊松
渡辺政吉

32回
浅岡博
大島公男
大塚為吉
笠原直三
笠原六郎
木村義也
北村博繁
解良順雄
桑原靖治
小林力三
斉藤英二
斎藤凱
沢山八十
清水七治
霜鳥重策
曽我英彦
竹林松二
高橋恭平
中原彦之丞
庭山政次
長谷川政二
樋口昇
星野忠五郎
丸山岩治郎
鎗居恒夫
本間忠孝

33回
磯部佐吉
植木実就
金子英二
川上英三
川村欽治
小林泉
佐野賢一郎
佐々木勧
清水弥寿雄
高橋真二
高橋又治
永井行蔵
春平木五郎
平石恒夫
広木克己
広瀬広
福山忠司
藤島寛
星順治
堀川秀一
松浦錦一郎
山添三郎
山田平五郎
山田又一
若林清

34回
荒川貢
今井一雄

小野塚忠義
小田久三
大西正三郎
柏森忠四郎
神田坤六
清野力
北村治作
北村秀以
木村元
櫛谷吉作
佐久間信吉
佐々木栄一
佐藤彰治
坂井義雄
関川信丸
相馬貞蔵
長浜浪治
林保
林啓介
樋口忠
樋木耕平
堀吉蔵
堀保利
真宗孝亮
山本達雄
吉田剛男
渡辺英一
渡辺芳雄

35回
浅野豊
天池貞二郎
五十嵐久四郎
石本省吾
石本謙三
飯村豊郎
今成一郎
内田善衛
大島恒好
大屋正夫
岡十兵衛
小柳胖
熊倉雄三
小出藤吾
小林商司
小山久一
近藤修百之
佐藤昌治
斎藤良明
沢山雄三
須田慎三郎
相馬雄男
武田利一
寺田信
中村信男
丹路喜久次
古川求藏
丸山栄一郎
山岡健
吉

36回
青山勇三
青柳英夫
阿部市蔵
石橋健男
伊藤栄
池政雄
入山芳雄
今井二正
植木市
松木宇佐美
上野一益
小川種太郎
岡田信雄
加賀田二四夫

加山春雄
風間政一
金井宣夫
君健男
久保文苗
久保田昌次郎
倉田亨
児玉賢雄
佐藤信
斎藤吉之助
斎藤英四郎
関昇夫
関根達夫
関根勤
高木利夫
田中武
田中清太郎
寺井元一
富所太三郎
西藤司郎
西村清一郎
針貝信吉
伴修
樋口均
福田謙也
前田節雄
藤田九三郎
丸山英二
宮尾正雄
宮島美代吉
吉川恒雄
村山信雄
山田敏雄
若槻博

37回
阿部広雄
浅井正宏
伊藤正春
榎並平
遠藤稔
笠原吉三
会純道
小林正二
桜井悌一
佐藤正二郎
鈴木正郎
田中郁
田中俊二
田中真一
田中正
田中恒彦
田中巻睦
高橋治一
富永良
二木哲一男
野末武夫
馬場幸一郎
原林
真柄元四郎
増田誠
三間裕惇
武藤実
村木門吉
吉田正二

38回
安達奎吾
池田正昭一
石黒得武一
太田正
大沼正一夫
小沢信男
河上由夫
勝田田虎
神田利武一
清野準郎
小林三郎

後藤林八
近藤円
笹川仁一郎
沢野十蔵
重野仔一
渋木謙雄
関秀郎
田巻二男
竹石三朋幸
高橋英男
等々力勇作
田村実
中村武
藤宮徹
舟崎徹
細野哲雄
真柄衛
宮路四郎
山口五郎久
山田重正平
山田昇夫
山田昭平
吉田正
渡辺義

39回
味方恭一
阿部助尚
阿部尚信
石高正
今井初
猪原虎
上野恵司
大小内尚三
武田正雄
岡崎孝治
川田輝虎
鎌北立夫
小林正人
小林芳輔
斉藤喜十郎
斎藤喬
佐藤平八
佐藤裕雄
佐藤誠義
佐藤勢一
田中誠一
高中正栄
中藤健
福木得司
枡山延健
松田山次
松谷田児
前田貞夫
皆川登良正
皆川竹次
宮原正
村田郎
山崎寿
山田二郎
吉田松一
若林栄

40回
会田俊雄
浅妻直末
阿部富衛
阿部倍男
安上田祐
井村沢郎
池田柳樹
井小柳郎
小田穀
熊倉武夫

倉田浩吉
小島松一郎
小林礼四郎
小林孝三郎
小山賢市
白勢敬二
渋川七夫
鈴木保穂郎
田宮篤二郎
田宮弥一郎
高田信郎
高橋鋼吉
竹林正五郎
池主憲
土屋瀬正均
広早山悦威
古堀川淳司
堀川秀政
本間寛章
松田一郎
松浅市作
湯渡辺雄
渡吉岡武憲

41回
小安黒保栄
相田正吾
今井川正夫
井上栄男
今成隼一次
金子清
神田明
木村新
菊池晌三郎
倉島恒雄
坂井寿夫
佐藤家之助
志賀潔
白井哲夫
茂野重蔵
高橋英雄
高橋正蔵
高島蓊
高橋正夫
高野沢五郎
富永井昇
井村昌利
丹羽正
野末正
番布施三栄
本間敏
丸潟馨
宮山島嘉次
山谷修一郎
山岸小五
山田弘
柳川実
八木木勝
渡部富義
渡辺忠雄

42回
阿部辰一
相沢康平
飯島利良
飯田山利
石井包
今泉景
今石本武
薄田開
小野隆

大野総一郎
大谷友之助
大谷修三
岡嘉一
岡富之助
加藤悦平
金沢裕
菊地勲
神林駒年
鋤柄実
北村惣一郎
佐々木庫
斎藤万亀男
塩谷正雄
重田学
鈴木一男
武藤幸吉
高橋二郎
高野登
高橋吉郎
高橋宏
玉木深根
堤清作
冨田秀雄
塚野一郎
東城真佐男
鳥羽正隆
豊岡憲夫
中野一松
中西山秀夫
長谷川友也
樋口正
福田茂夫
広沢義斉
藤本間勉
丸山平次
三国文治郎
村田豊
本宮洵

43回
今井亮
市橋敏雄
小野寺稔
小沢省三
加賀田達二
加藤行輝
鍵富馨
菊池芳郎
倉井清
栗山房之助
倉田久介
近藤種臣
黒岩広雄
笹川謙録
佐久間正平
佐藤繁
佐藤彰平
佐藤和吉
佐野真一
佐藤真之助
沢田昂
渋木貞男
鈴木英夫
竹石真
田中憲
田沢義正
滝野川雄
野早田陽
浜早昌栄
樋船口春
丸山直
水田千

渡辺一郎
渡辺幸蔵

44回
池田元之助
岩谷丞
遠藤健一
小川義郎
小原康作
小原高志
金子一夫
片桐繁作
加藤斗南
北沢裕
小池寿哉
小林広安
小泉大三
小林璋吾
佐々木勧麓
清水俊郎
鈴木繁男
佐藤敬雄
斎藤三郎
田辺啓三
田中勝
田谷沢肇
田宮芳夫
手寺島聡
寺鳥田正寛
鳥羽永
中野彪
中尾健
西観司
仁多見一彦
錦織登美夫
西山尚三
早川広吉
平原芳郎
広川勇一郎
平野野次
本間栄
峯木鉄夫
村山敏夫
山下稔二
山崎関政
山田英俊
山根俊英

45回
青山基三
阿部敬宇
石崎政平
井上晃郎
稲葉敏男
市島正
扇嘉家
大滝俊夫
沖野準
鹿取邦男
金沢徳太郎
川上喜八郎
河辺邦昌
川村明
小島平弥
坂井達男
小山尚一
佐久間昌行
酒井敏賢
清水
白倉
渋谷芳
鈴木茂
鈴木俊夫
鈴木睦
関崎
滝沢久衛
谷口弘
高橋光雄

高山照三
等々力迪男
長島信司
橋本良材
長谷川健次郎
治雅樹
福田賢弥
本間泰輔二
泉寛
丸山泰二雄
村山長吉
山際昌介
綿井兵衛

46回
上杉栄一
江口松弘
遠藤朔
遠藤義男
大久保松男
大越健治郎
小熊幸男
加藤国男
鍵冨春雄
片桐英一三
川上慎
熊谷大輔
工藤常磨
栗原道一
小林誠
小山崇
下勇
渋谷平
高野喜夫
高島達吉
高橋敬
谷欽也
高橋是成
芽原敏也
塚野雄
上屋松公
椿一郎
鶴巻鉄三
富所強哉
永井達吉
中田紳一郎
新田公淳
西馬場吉郎
浜田敏衛
林潔
原泰三
広川敏郎
広神良彦
本田富雄
峯木照徹
宮尾益夫
湊栄英
横山隆二
米原進
山田市男

47回
朝日翠
池重雄
飯沼竜一
伊藤元司
内山吉郎
風間勲
鍵井整
飯持栄一
斎藤浩一
斎藤暲太郎
清水善夫
巣山雄二郎
田中博